



町誌発刊のことば

遠賀町長 柴田貫蔵

遠賀の里は、古代から遠賀川の流れを中心に遠賀川式農耕文化の発祥地として、日本の古代史に重要な位置をしめ、本町の平坦部は大半この遠賀川の河川堆積に因り形成されてきました。

戦国時代から近世にかけて、当時葦牟田等の低湿地であったものを、江戸時代に入って積極的に新田開発が進められて今日の沃野が拓け、その開発の歩みの中で営々と築いてきた土木・水利の技術は当時の住民の英知と努力の結晶で、そのなかに温い人情、風俗がはぐくまれ、いわゆる、川筋文化として、今日、本町の物心両面に亘る支えとなり、底流となって、村から町へと新しい生活の舞台を形成してまいりました。

明治二十二年四月市町村制が敷かれ、今までの村々が合体し、南部四ヶ村で浅木村、北部六ヶ村が合併して島門村が誕生いたしました。また、昭和四年四月には、土木・水利・産業などを同じうする両村が合併し、遠賀村の誕生となったものであります。

以来五十有余年が経過いたしました。戦中・戦後の激動期を経て、昭和三十年代の高度経済社会への展開と相まって、本町の装いも純農村から近郊農村へと姿を変えながら、昭和三十九年四月町制を施行し、北九州都市圏の一翼を担い田園都市としてスタートをいたしましたのであります。

昭和五十九年に町制二十周年記念事業の一環として刊行を計画し、かねてから編集作業を進めておりました遠賀町誌が漸く完成し、ここに発刊の運びとなりましたことを心からお喜び申しますとともに、町民の皆様のご利用を願って止みません。

最近の著しい科学・経済・文化の発展に伴なう社会機構の変化は、価値観の多様化等複雑な世相を生み、また本町の歴史を支えて来られた古老が一人、二人と去られ、次第に古きものが失われつつある現状を見ると、失われ行く真実を史実として止め、ここに記録を残すことは、私達町民に課せられた使命でもあらうかと存じます。

私達は町民各位が、この町誌を正しく理解し、先人の残した豊かな郷土を心から愛し、さらに又新しい「町づくりの糧」として有効に活用していただくならば誠に幸甚に存じます。

今回、町誌を刊行するに当りまして、長年に亘る資料収集や執筆に惜しまぬご苦勞をいただきました町誌編集委員会の片山委員長並びに編集委員の皆様、また本町の古代・中世について特別執筆をお願いしました奥野先生、恵良先生、そして町誌全体のまとめと監修について格別なお力添えを頂きました能美先生、更に町誌発刊に対する資料提供や現地調査など積極のご協力をいただきました町内外関係者の皆様方に深く感謝の意を表するものであります。

昭和六十一年一月



遠賀町誌の発刊を祝して

遠賀町議会議長

井口 時彦

遠賀町誌の発刊を皆様と共に心から、およろこび申し上げます。

遠賀川の流れ、響灘の潮騒・遠賀平野の水田の勾・村祭り・みんな私達の「ふるさと」なのです。この町に住み、育ち、日々の営みのなかから、本町の歴史と伝統が培われているのです。

本町は、太宰府官道に通ずる交通要所（島門駅跡）として、早くから、経済・社会・文化が発達し、遠賀川と川舟、広大な水田を中心とした農漁労生活の近代化が進んできたと思われまます。

明治22年、北部6カ村を以って島門村を、南部4カ村を以って浅木村を編成し、昭和4年両村が合併して遠賀村となりました。

大正年間に起った筑豊炭田もエネルギー革命の波は防げず、昭和37年三菱新入鉱業所、鞍手炭坑の閉山によって種々の問題をかかえながら、工場誘致をはじめとした産炭地振興が進められてきました。一方、戦後目ざましく復興した北九州重工業地帯の進展や国鉄電化などにより、従来の純農村としての形態様相も漸次変ぼうし、昭和39年町制施行するに至り、昭和47年頃から町内にも、新興住宅団地が誕生し、田園が住宅地となり、本町にもベクトタウンとして都市化の波が押し寄せ、昭和55年の国勢調査では、県下第3位という人口増加率を示し、農村

遠賀としての継承と共に、今や、田園都市としての新たな装いのもとに、農村のゆとりと都市の活力をあわせもつ「豊かな生活都市」づくりが希求されています。こうした急激な社会構造の変化は、住民の価値観やニーズの多様化を生むと同時に、地域共同体のきずなはゆるみ、疎外感、孤立感、断絶が深まるなかで、地域社会の連帯感の育成とコミュニティづくりの充実をめざし、積極的な住民活動が期待されるところであります。

私共の祖先、先輩が幾多の苦難を克服し、村づくり、町づくりに大変努力された歴史に学び、その沿革を明らかにして、さらに住みよい郷土づくりの貴重な資料としなければなりません。幸い、遠賀町制施行20周年記念事業として、遠賀町誌の発刊が計画され、古代・中世・近世・現代に亘り片山武司氏外7名の方々による丹念な資料の集録と編集、そして、監修は斯界の権威である能美安男先生にさせていただき、見事に完成の運びになりました。ことは、昼夜をとわず献身的なお取組みの結果であり、有難くこの上もない喜びです、厚くお礼を申し上げます。

「遠賀町誌」が、わが町の歴史集として末永く手近に保存活用され、本町の将来の展望をみちびき出し、未来の方向づけに、また、問題解決への有力な手がかりの糧となることを期待してやみません。最後に、この発刊の喜びを全町民とともに、わかちあい度いと存じます。ここに、関係者各位に対し議会を代表して敬意と祝意を表す次第です。

昭和六十一年一月

凡 例

- 一、文章は当用漢字、現代かなづかいを原則とするが、引用文、歴史的表現、固有名詞等は原則に従っていない。
- 一、資料集を作製しないため、地元の史料はできるだけ採用し、原文通りを原則としている。公刊されている史料は書き下し文に改めたものもある。引用文中も当用漢字のあるものはそれを用いている。
- 一、本文に引用した以外の史料は一段下げ、8ポイント活字で示している。
- 一、年号は和暦年を用い、明治以前は（ ）内に西暦を併記している。
- 一、年月日の表記には和数字を用い、数量を示す場合には万以上にのみ単位の表記をしている。
- 一、計量の単位は尺貫法とメートル法を併用、尺貫法は必要と思われる場合にはメートル法に換算している。
- 一、典拠資料の表示は、原則として、巻末の参考文献に示す数字で傍註し、頻出度の低いものは当該箇所割註で示している。
- 一、敬称は原則として省略している。
- 一、掲載の地図は、第1―2図(国土地理院 昭和三〇年版 二万五千分一図「折尾」)以外は遠賀町役場調製の地図を使用している。
- 一、本書の執筆分担は次の通りである。全体の統一は能美安男が担当した。第六編の現代に関する事項は一部遠賀町教育委員会が担当している。

第一編 能美安男

第二編 (第一次原稿) 福島茂雄 (第二次原稿) 能美安男

第三編 奥野正男

第四編 恵良宏

第五編 能美安男

第六編 (第一次原稿) 片山武司 (第二次原稿) 能美安男・遠賀町教育委員会

第七編 古野千年

第八編 古野千年

年表 能美安男

一、本文中に註記されている参考文献・引用文献は、原則として、巻末の「参考文献」より除外している。
一、見返の地図は小野邦雄氏蔵の明治八年「遠賀郡全図」の部分である。

遠賀町誌目次

町誌発刊のことば

町誌の発刊を祝して

凡例

遠賀町長 柴田貫藏
遠賀町議会議長 井口時彦

第一編 うぶすなの姿

第一章 遠賀町の自然	3
第一節 遠賀町の位置	3
第二節 風土と気候	7
一 遠賀町の気温	8
二 西風の多い気候	15
第三節 遠賀町の地質	17
一 沖積層	18
二 洪積層	23

	三	第三紀層……………	24
	四	中生層……………	26
	第二章	町勢のうごき……………	27
	第一節	大字と小字……………	27
	一	大字の境域と分画……………	27
	二	小字と地番……………	28
	第二節	市町村界の変更……………	35
	一	芦屋町との境界変更……………	35
	二	鞍手町との境界変更……………	36
	三	中間市との境界変更……………	36
	第三節	遠賀村より遠賀町へ……………	38
	一	島門村と浅木村……………	38
	二	遠賀村より遠賀町へ……………	40
	第二編	水に生きる……………	
	第一章	遠賀川……………	45
	第一節	近世以前の流域……………	45
	第二節	江戸時代の開拓と治水……………	49

一	慶長、元和、寛永の普請	49
二	延享の普請	54
第三節	遠賀川と水害	55
一	近世の水害	55
二	近代の水害	58
1	明治二十四年の水害	58
2	昭和期の水害	59
第四節	遠賀川改修工事	64
一	明治三十八年の水害と改修工事	64
二	鉱害と昭和の改修工事	70
第五節	遠賀川の利用	74
一	多目的ダムと遠賀川河口堰	74
1	遠賀川よりの取水	74
2	遠賀川河口堰の計画	75
3	遠賀川河口堰対策協議会の発足	75
4	農業団体の反撥	76
5	遠賀川河口堰の着工	77
6	遠賀川河口堰の概要	78

二	災害の予防	80
1	曲手排水機場	80
2	前川排水機場	81
3	洪水の予報	82
三	流域の発展と水運	83
四	遠賀川の産物	84
1	遠賀川のサカナ	84
2	稜と河砂	88
五	遠賀川の橋	89
第二章	神田川	92
第一節	神田川の開削	92
第二節	神田川の利用	95
一	団七堀と塩田堰	95
二	旱魃と寿命のネコ掛け	97
三	遠賀川の改修と神田川	100
四	神田川と下大隈堰	101
五	神田川水利権問題	103
六	河口堰と神田川	105

第三章	山田川	106
第一節	沿革と利水慣行	106
第二節	水利組合による管理	113
第三節	花ノ木堰の大改修	116
第四章	西川	119
第一節	藩政時代の西川	119
一	河道の変遷	119
二	灌漑と水運	124
三	川浚え	127
第二節	明治以降の西川	129
一	明治時代の水利組合	129
二	西川の水運	132
三	西川改修期成会	137
四	昭和初期の西川	139
五	西川の改修	144
六	鉱害と排水機場の設置	148
1	排水ポンプ場	148
2	広渡排水機場	149

七	西川筋鉾害復旧全体計画	151
第三節	戸切川と前川	152
第四節	遠賀町の溜池	155
第五節	西川と戸切川の橋	157
一	西川の橋	157
二	戸切川の橋	162
第三編 先史より有史へ		
第一章	原始・古代の遠賀川流域	167
第一節	古遠賀瀉と沖積平野の生成	167
第二節	縄文時代	172
第三節	弥生時代	185
一	縄文晩期・弥生前期初頭の遺跡	186
二	弥生前期の遺跡	187
三	弥生時代中期の遺跡	190
第四節	古墳時代	196
一	古墳時代前期・中期(四、五世紀代)	196
二	古墳時代後期(六世紀以降)	200

第五節	古代の遠賀……………	206
一	神話伝承にみる古代の遠賀……………	206
第六節	古代遠賀の氏族と信仰……………	210
第二章	奈良・平安時代……………	218
第一節	大化改新……………	218
第二節	行政組織……………	219
第三節	遠賀郡の郷名比定……………	220
第四節	遠賀郡衙……………	222
第五節	班田収授と条里制……………	223
第六節	貢租制度と農民の生活……………	225
第七節	大宰官道と駅家……………	226
第八節	遠賀軍団印と兵制……………	228
第九節	広嗣の反乱と遠賀郡家……………	231
第一〇節	奈良・平安時代の遺跡……………	235
第四編	中世の遠賀町……………	
第一章	鎌倉時代の遠賀町……………	241
第一節	源平争乱と遠賀地方……………	241

第二節 鎌倉幕府の九州統治……………

第二章 中世後期の遠賀町……………

255 244

第五編 近世の遠賀町

第一章 藩政時代の村々……………

273

第一節 黒田氏入部と遠賀地区……………

273

第二節 遠賀町域村々の成立……………

276

第三節 遠賀地区の石高……………

281

第四節 村々の田と畠……………

289

一 灌漑用水……………

289

二 水下田数と歩割……………

292

三 畠の作物……………

295

四 土質と作物……………

296

五 作掛り人数……………

297

六 薪……………

298

七 島津村の地組……………

299

第五節 湯川山牛馬牧仕組……………

302

一 仕組馬吟味役……………

302

二	湯川山牧	306
三	牛馬牧仕組	308
四	その後の牛馬仕組	311
第二章	郡役所と郡方役人	313
第一節	代官	315
第二節	郡奉行	321
第三節	役所定と役人の心得	327
第四節	郡代	330
一	代官頭と郡代	330
二	郡代勤方覚(享保二十年正月十四日)	332
三	郡方役人心得(享保十六年三月二十五日)	332
四	免奉行郡代役所定(元文元年十一月晦日)	334
第五節	郡方手附	335
第六節	郡方役人の移動	338
第三章	庄屋大庄屋と郡村の行政	342
第一節	国郡行政と郡村の接点	342
第二節	大庄屋と庄屋	343
第三節	遠賀郡の大庄屋と触	344

第四節	村の行政	349
第五節	村役の立場	352
第六節	身分と格式	354
第七節	米金献納と称誉	359
第八節	大庄屋の家	367
第四章	年貢の収納	371
第一節	田の年貢と畠の年貢	371
第二節	枅	372
第三節	貢米の輸送	375
第四節	貢米の収納	376
第五章	水との闘い―遠賀川―	383
第一節	遠賀川の変遷	383
第二節	洪水と水害	391
一	天保十一年の洪水	391
二	嘉永三年の洪水	393
第六章	凶作と飢饉	407
第一節	享保の飢饉	407
一	年曆算にみる飢饉	408

二	岡郡宗社志の飢饉	409
三	飢饉とその対策	412
二	寛政の飢饉	415
三	天保の飢饉	419
四	貯穀制度	421
五	倭約令と糧物喰延	424
一	倭約令	424
二	天明の飢饉と糧物喰延	433
六	凶作と米価	436
第七章	近世の交通	443
一	藩政時代の街道	443
二	街道と夫役	448
三	伊勢参宮	451
一	伊勢への旅	451
二	参宮の風習	457
第八章	藩政末期の遠賀町―幕末より明治へ―	460
一	主な出来事	460
二	コレラの流行	464

第六編 開けゆく郷土

第一章 明治時代前期の社会

第三節 窮民救済米醸出	466
第四節 豊長戦争余波	469
第五節 御登京御借入金上納	476
第六節 農兵	478
第七節 神仏分離	482
第八節 明治二年の凶作	484
第一節 藩政より県政へ	489
一 過渡期の行政	489
二 過渡期の社会	491
1 幣制の混乱	492
2 飢饉と騒動	494
3 衣食住制度の廃止	497
4 解放令と戸籍編成	499
第二節 大小区制より町村制へ	500
一 大小区制と郡制の復活	500

二	地租改正	507
1	壬申地券と地引絵図	507
2	地租改正	512
三	筑前党民一揆	516
四	福岡県会と遠賀郡選出の議員	519
第二章	明治時代後期の社会	523
第一節	島門村・浅木村の誕生	523
一	明治二十二年の遠賀町	523
二	歴代の村政担当者	527
第二節	明治末期の遠賀町	530
一	両村の村況	531
二	変り行く風習	535
三	将来への対応	536
第三章	遠賀村の誕生	538
第一節	合併への胎動	538
第二節	遠賀村の発足	540
一	合併前後の歩み	540
二	歴代の遠賀村町長と助役	545

三 遠賀村議會議員と町議會議員……………551

第三節 遠賀村の農地改革……………551

一 農地改革の経過……………551

二 遠賀村の状況……………558

1 農地の買収……………558

2 買収農地の売渡……………564

三 農業委員会……………569

第四章 変りゆく産業の姿……………573

第一節 遠賀村農業の姿……………573

第二節 遠賀町の農業……………576

一 明治初期の産物……………576

二 明治末期の産物……………580

三 明治以降の農法……………583

四 年雇から機械化へ……………589

五 今日の農業……………591

六 米の生産と流通……………596

1 どんな米を作ったか……………596

2 米価の変遷……………601

3	米の生産調整	602
七	圃場の整備	603
1	農業振興地域整備計画	603
2	畑地灌漑施設	604
3	耕地整理、土地改良と鉱害復旧	605
八	農会から農協へ	605
第三節	農業以外の産業	608
一	製瓦工業その他	608
二	石炭鉱業	611
第五章	新しい町	613
第一節	開発の進む遠賀町	613
一	変わりゆく地域の姿	613
二	同和对策事業	615
三	遠賀中間地域広域行政事務組合	615
第二節	遠賀町の交通と通信	618
一	道路交通	618
二	鉄道輸送	620
1	遠賀川駅と室木線	620

2	国鉄芦屋線	622
3	芦屋鉄道の思い出	623
4	室木線の廃止	624
三	遠賀川郵便局と電報電話局	627
第三節	遠賀町の施設	628
一	水道事業	628
1	共同井戸と共道水道	628
2	上水道	631
二	消防署	633
1	遠賀郡消防署	633
2	遠賀村消防組	633
3	昭和十一年の防空演習	638
三	遠賀町商工会	652
四	その他の施設	656
1	老人憩の家	656
2	保育所	657
3	公営住宅	657
4	都市公園	658

5	町営遠賀霊園	659
第六章 教育と文化		
1	第一節 教育委員会	660
2	第二節 学校教育	662
1	一 私塾と寺小屋	662
2	二 小学校の誕生	665
3	三 遠賀町の学校施設	668
1	1 浅木小学校	668
2	2 老良小学校	671
3	3 島門小学校	671
4	4 広渡小学校	675
5	5 遠賀中学校	677
6	6 遠賀南中学校	678
7	7 遠賀高等学校	679
8	8 遠賀中央幼稚園	682
9	9 遠賀町学校給食センター	684
第三節 社会教育		
1	一 社会教育の施設と機関	686

1	遠賀町中央公民館	686
2	類似公民館	687
3	遠賀コミュニティセンター	689
4	社会体育と施設	690
ア	遠賀勤労者体育センター	691
イ	遠賀町武道場	691
ウ	遠賀弓道場	691
エ	遠賀総合運動公園グラウンド	692
5	社会教育機関及び団体	692
ア	社会教育委員会	692
イ	青少年問題協議会	693
ウ	公民館運営審議会	693
エ	体育指導委員会	693
オ	地区公民館連絡協議会	694
カ	豊かな心を育てる施策推進協議会	694
キ	青少年育成町民会議	694
ク	遠賀町体育協会	695
ケ	遠賀町婦人会	695

	コ	子供会育成会	696
	6	同和教育研究協議会	696
第四節		遠賀町の文化	700
一		『岡県集』の人々	700
二		上野芳草と『涙余編』	705
三		伊藤常足と遠賀町	708
四		占部稜威男と今泉神社八景	711
五		吉岡禪寺洞の来訪	713
六		高家天満宮献納額の歌	715
1		菅廟十二勝	715
2		法楽和歌大額	717
3		野村望東尼	719
七		広渡八剣神社奉納額	720
八		松琴亭聴雨と浅木句会	722
九		遠賀洗心会の人々	723
第七編		信仰と生活	
第一章		明治維新の宗教政策	733

第一節	神仏分離	734
第二節	祠堂と社格制度	738
一	無檀無住寺院	738
二	神社と社格	740
三	氏子調べと氏子札	742
第二章	遠賀町の神社と教派神道	744
第一節	新しい宗教政策	744
第二節	遠賀町の神社	746
一	浅木神社(浅木)	746
二	伊豆神社(島津)	769
三	住吉神社(若松)	772
四	貴船神社(鬼津)	776
五	地主神社(鬼津)	782
六	牟田神社(尾崎)	784
七	白山神社(尾崎)	788
八	皇太神宮(尾崎)	789
九	今泉神社(別府)	789
一〇	貴船神社(別府)	796

一一	天満神社(上別府)	797
一二	山崎神社(上別府)	806
一三	高田神社(虫生津)	812
一四	井手神社(木守)	818
一五	老良神社(老良)	827
一六	八剣神社(今古賀)	829
一七	八剣神社(広渡)	833
一八	島門神社(広渡)	836
一九	貴船神社(今古賀)	838
第三節	遠賀町の鳥居と絵馬	839
一	町内の鳥居	839
二	町内の絵馬	844
第三章	遠賀町の寺院と堂塔	850
第一節	町内の寺院	850
一	関松山栄宗寺	850
二	瑞華山常楽寺	853
三	松林山行満寺	854
四	恵日山西光寺	857

	五	沖塚山妙雲寺	858
	六	弘法山專修院長岸寺	859
	七	法林山道場院長樂寺	860
	八	福祥寺	866
	九	堂塔寺	866
	一〇	法雲寺跡	867
	第二節	路傍の神・仏たち	868
	一	古墓と廢寺址	868
	1	堂塔寺址	868
	2	南蔵山墓地	868
	3	菊池武重臣村上之墓	869
	4	尾崎城ノ越古墓	869
	5	幽林道劍の墓	869
	6	安増甚左衛門之墓	869
	7	福寿院址	870
	8	麻生氏墓	870
	9	道場寺址	870
	10	底井野姥塚	871

イ	東光寺址	871
ロ	心光庵址	871
ハ	西光寺址	871
二	地区の神・仏たち	872
1	島津区	872
2	若松区	873
3	鬼津区	873
4	尾崎区	876
5	別府区	877
6	今古賀区	878
7	木守区	879
8	上別府区	882
9	虫生津区	886
10	浅木区	890
11	広渡区	892
12	老良区	895
13	旧停区	895
14	松ノ本区	895

	三	一字一石(葉)塔	898
第四章		祭りと信仰	900
	第一節	村の祭り	900
		一 おくんち	900
		二 いろいろの小祭	903
		1 お日待	903
		2 子祭	904
		3 亥の子祭	904
		4 社日祭	905
		5 駄祭	905
		6 種浸し	906
		7 宮座	906
	三	万年願	910
	第二節	講と順礼	912
		一 地藏尊信仰	913
		二 庚申信仰	914
		三 千人参り	918
第五章		史蹟と口碑伝説	927

第一節	遠賀町の史蹟	927
一	島門駅	927
二	城跡	928
1	五郎城址	928
2	マルビ砦址	928
3	千代丸城址	929
4	高家城ノ越	930
三	伝説地と口碑	931
第六章	称誉者と記念碑	942
第一節	称誉者	942
第二節	記念碑と頌徳碑	946
一	記念碑	946
1	神田川碑	946
2	老良尋常小学校記念塔	947
3	耕地整理記念碑	948
4	鉱害復旧記念碑	948
二	頌徳・顕彰碑	949
1	彰義柴田次左衛門林惣右衛門之碑	949

第八編 村落と生活

第一章 村の組織と衣食住

第一節 村落共同体

第二節 村の衣食住

一 衣

二 食

三 住居

2 占部先生之碑……………951

3 烈婦源六妻碑……………952

4 有吉南耕先生寿碑……………953

5 柴田直敏翁寿碑……………954

6 村田登七郎君之碑……………955

7 古野矢八郎翁碑……………955

8 法学博士添田寿一君寿碑……………956

9 頌徳上野俊松先生之碑……………957

10 戦歿者慰霊塔……………959

三 歌碑と句碑……………964

……………969

……………969

……………974

……………974

……………974

……………977

第二章 人の一生……………	979
第一節 出産の風習……………	979
一 出産の前後……………	979
二 子供の祝い……………	981
第二節 結婚の風習……………	982
一 若者組……………	982
二 結婚……………	983
三 厄祝い……………	990
第三節 葬送の風習……………	990
一 死亡……………	990
二 野辺の送り……………	992
三 死者への供養……………	994
第三章 年中行事……………	995
第一節 正月の行事……………	995
一 大正月の行事……………	995
二 小正月の行事……………	997
三 二十日正月と旧正月……………	998
第二節 春の行事……………	999

第三節	夏の行事	1000
第四節	秋の行事	1004
第五節	冬の行事	1005
第四章	村の芸能	1007
第一節	芝居興業について	1007
一	藩政時の規制	1007
二	浄瑠璃と操	1010
三	三味線墓について	1011
第二節	地芝居	1012
第三節	伝統の民俗芸能	1016
一	あしなか踊	1016
二	思案場所踊	1017
三	相撲	1018
1	記録にみる相撲	1018
2	遠賀の三大相撲	1019
3	木守区の歴代力士	1020
四	民謡	1022
五	わらべうた	1034

六	子守唄	1038
第五章	日常生活の中の民俗	1039
第一節	子どもの遊び	1039
一	男子の遊び	1039
1	竹製遊具	1039
2	木製遊具	1040
3	その他の遊具	1041
第二節	予知と禁忌	1042
一	前兆予知	1042
二	卜占	1043
三	禁忌	1044
四	まじない	1049
第三節	方言と俗語	1051
	遠賀町年表	1065
	参考文献	1091
	資料等提供者	1095
	編集後記	1096